

八女山間における高級茶生産の問題点と展開方向

平川一郎(福岡県農業総合試験場)

Ichiro HIRAKAWA: Production and Farm Management of
High Grade Green Tea on the Yame Valley

1. 背景と目的

福岡県の八女山間地域の玉露は全国の生産量の半分近くを占めているが、1975年以降消費が停滞気味で、価格も伸び悩み、収益性は低下している。一方、林業も不振に陥っており、山村の産業に占める農業の相対的比重は増大している。

このような背景のもとで高級茶生産の問題点と方向を探るため、1984年度から1986年度にかけて、八女山間を対象として1集落全戸の農業経営の概況調査を行い、続いて茶生産の規模拡大や、高級化の努力を行っている農家を抽出し、経営調査を行った。

2. 八女山間における茶生産の立地的問題点

高級茶生産上の問題点の第一は圃場条件の劣悪さと規模の零細性である。急傾斜が多く、圃場は狭く不整形である。農道は不備で、機械の利用は困難である。茶園面積50a未満の農家が85.9% (1981年)を占めており、1ha以上は77戸、わずか1.8%にすぎない。

第二に摘採開始期の遅さである。八女山間の摘採開始期は早くて五月初め、五月中旬になるところも多い。価格は早いものが高いため、価格競争の点で不利である。

第三に機械化に伴う問題である。防霜ファンによる霜害の危険の除去は、平地の有利性を向上させ、摘採機の発達も、平地にのみ機械化による省力化の利益をもたらしたため、山間に相対的な不利が生じた。

第四に、高級茶の生産に伴う生産量の低さである。高級茶では一番茶のみの摘採となり、せいぜい二番茶までしか摘まないため、面積当たり生産量が減少する。また茶の芽立ちが遅いため、生葉の生育量も少ない。

3. 茶生産における経営上の問題点と今後の展開方向

1) 高級茶生産の相対的不利 手摘みは、労賃の高騰の中で厳しいコスト高となっている。複雑な地形は機械化を困難としており、山間での生産を不利にしている。また早出しの産地でもなく、これらの不利な条件を品質格差で補おうとするが、消費の停滞と相まって補償できるだけの価格差を形成できていない。

2) 専業の低生産性と兼業の高生産性 農家群別の分析では、恒常的な兼業に従事している規模の零細な経営で面積当たり収益性が高く、規模が大きく男子専従者もいる専業経営において品質、収量ともに劣り、収益性も低くなっている。

これは主として圃場条件と作業体系に由来している。この地域のような圃場条件下では作業の高効率化は困難である。茶生産の作業体系で機械化が進んでいるのは摘

採と運搬、製茶であるが、山間地では摘採機は使えず、圃場が零細で分散しているため、運搬も機械化の利益が少なく、製茶工程も摘採の条件から大型の機械が利用できない。防除、中耕除草などの機械化も、圃場条件の悪さと、規模の零細さのために効果的に導入できる状況ではない。

以上の状況では、零細な規模で農閑期の労働を婦人主体で行って、摘採期には雇用労力に対応する形態が、面積当たり収益性を高めている。専業農家としては高級茶の面積割合を増やすことによって、かえって収量、品質を低下させ収益性を落す結果を招いている。

3) 圃場条件の未整備 圃場条件の整備と、圃場の集中、規模の拡大といった土地所有の問題がある。圃場条件の整備は、傾斜地であり、複雑な地形のため容易でないが、集落の周辺などでは整備可能な部分がある。その場合最大の問題は土地所有であり、ある程度の集団化は必要条件である。計画的に一部分ずつでも整備していく必要がある。

4) 高級化、規模拡大の可能性 高級茶生産拡大の条件の第一は圃場の集団化である。第二は圃場条件で、整然と植栽が行われていることである。在来の園と近年整備された園では作業の能率が違っている。第三に摘採期間の延長があり、標高差の利用、品種の組合せ、栽培法の工夫などによって、一番茶の摘採幅を約1ヵ月間に延長し得る可能性があり、規模拡大を図ることができる。

しかし、このことに関しては、製茶工場の運営期間が一つの問題となる。零細な農家が大部分で、製茶作業が短期間に集中し、工場の操業も短期間に終了する現状では、大規模化して摘採時期を広げることができない。

規模拡大のもう一つの方法は、圃場条件が整備された機械化の可能な圃場で、一定以上の面積のはさみ摘みの煎茶を取り入れることである。新規開園は大規模な投資を必要とするため投資の経済性を十分検討することが重要である。今後の展開としては、大規模に開園できる条件の土地を求めてはさみ摘みの煎茶を生産し、集落周辺の玉露と組合せて、茶生産の拡大と収益の確保を合せて行うことが必要である。

5) 茶生産の低コスト化、省力化 経営費の主なものには肥料費25%、製茶料金24%、雇用労賃18%、農業費8%である。肥料費、農業費は収量、品質との関連があり、早急な節減が難しい。生産費では自家労賃の評価額が50%を超えているが、雇用労賃の節約の意味を含めて省力化が重要である。製茶料金の節約は個別では困難であるが、共同茶摘み、合葉、工場の合併、工場運営の改善などにより低コスト化を図る必要がある。